

# Gallery 愛海詩

えみし

## 木工作家(大阪市) 甲斐幸太郎 作品展 日本工芸会 正会員

11月22日～12月4日

彩遊の号 No.46  
愛海詩の会  
会報  
令和4年11月10日発行  
編集発行人/ギャラリー愛海詩  
佐藤 睦子  
〒064-0821  
札幌市中央区北1条西28丁目2番17号  
TEL・FAX/(011)613-1112  
WEBSITE  
http://www.emishi-s.com  
E-mail:kougei@emishi-s.com

◎新型コロナウイルス感染予防ガイドラインに沿って対応させていただきます。  
◎ギャラリー愛海詩へいらっしゃる時は、そのご予約をお手数ですがお電話下さい。

その道で生きるプロは喜びの中で見紛うことなく形にして行く。コソツコソ、コソツコソ。  
(佐藤 睦子)

「えみし」は北海道の古称です。私共のギャラリーは「愛海詩」と書きます。北海道の作家、その手技を大切にしよう。と二十四年前に創立した小さなギャラリーです。そして同時に、多くの人達との関わり合いの中で育てて行こう。と「愛海詩の会」を立ち上げました。長く見守り、励ましをいただく会員が何人もいらっしゃることは、有りがたいことです。ギャラリー創立当時は、手技を持つ作家と出会うために、道内いろいろ回りまわした。海沿いの作家も山の作家もつかなかった。作家がなかなかいらつしやいませんでした。ギャラリー愛海詩・愛海詩の会の思い、理念は創立当初から変わってありませんが、その思いを書いた企画書を床に叩き付けられたこともありました。「愛海詩」は厳しい船出でありました。私はより以上に手技と人柄の両立にフォーカスしました。やはり、何事も「人、技、ありき」なのです。自然、航路は本州の職人や作家にも目を向けられました。この「人、技、ありき」を大事にしなければ、愛海詩の舟はいつまでも揺れ、難破していたかも知れませんでした。当ギャラリーの最近の作品展を振り返りますと、北海道の作家、本州の作家と順に企画させていただいておられます。本州の作家とはトントンと話が進む反面北海道の作家とのやりとりのマツタリ感はどういうことなのだろう...と思ってもあります。北海道、本州、各々の作家の良さは解りますが、仕事、物創りに対するプロ意識、その意識の発し方の違いがあるのかも知れません。

楽しみにしていた作品展がいよいよ始まります。甲斐幸太郎木工作品展。甲斐氏との出会いは、NHKの番組、日曜美術館にその作品と共に映し出された時の感動を胸に、令和元年の秋、大阪に訪ねた時です。思った通りの作品、お人柄に話しは進み、ご縁をいただきました。ギャラリー愛海詩で2回目の作品展です。盛器、花入れ、重箱、銘々皿など、約35点を展示します。全て甲斐氏のオリジナルが多く、他には無い作品、実用作品は使いやすく、飾っても楽しくという、使う毎に1つ1つの作品に物語が生まれて来ます。作品作りはどちらかというと閑きではなく、自身が日々考え、思い続けている事の蓄積が形となって現れる、と甲斐氏は申します。疎かにできない、日々の重ねがそこにあります。また、「コロナ禍の中でも皆様の励ましがエネルギーになっている」と申します。4年前から日本工芸会、近畿支部木竹部会の副部長も勤め、多忙な日々を送っておられるのですが、甲斐幸太郎氏の作品は進化しています。北海道、札幌のみならず甲斐氏の作品、本人とも出合っていたら、エネルギーのやりとりをしていただきたら幸いです。

「ご挨拶」作品展によせて」  
木工作家・甲斐幸太郎  
一昨年から続くコロナ禍の中ですが、有難いことに変わらぬ工を続けることができ、支えて下さる方々や仕事ができる環境に日々感謝しています。また、このような中にもかかわらず二回目の個展を開いていただき、ギャラリー愛海詩様には心から御礼申し上げます。再び皆様に作品をご覧いただけることを嬉しく思います。師の許を離れ自分で創作活動を始めて十一年が過ぎようとしています。私は主に刃物という技法で制作してきました。刃物は木工の伝統技法の一つで、ノミ、鉋、小刀等の刃物を用いて木の塊から作品を削り出す技法です。彫刻的要素が強く、自由な造形で器物を制作することができます。その反面、木を削り抜くのは大変な手間がかかり、生産性が低いことから生業として携わる者が非常に少ない仕事です。学生の頃、私は人間国宝・黒田辰秋先生の作品に感動し刃物をしたいと思うようになりました。そして幸運にも黒田先生の内弟子である藤寄一正先生の工房で勉強させていただきました。独立し試行錯誤を続けて十一年、先生方にはまだまだ及ばませんがやっとな得のいく作品を作れるようになってきたところです。制作をする際に心がけていることは、造形はできるだけ端的に、技を凝らす素材の持ち味を大切に、おろかかでも心温まる物、素朴な中に品のある物を造りたいと思っています。その上で、これまでにない新鮮な感覚の表現を模索しつつ自分独自のスタイルを求めていきたいと考えています。自分が黒田先生の作品に感動したように、自作も誰かに感動を与えられるよう励んでいきたいです。作品をご覧になり手にとっていただけて「木って良いなあ」と感じていただけたら嬉しく思います。どうぞご高覧くださいませ。



創作中の甲斐幸太郎氏

—— 略 歴 ——

1976年	愛知県名古屋市に生まれる
2003年	京都伝統工芸専門学校 木工芸専攻 卒業
2004年	第33回日本伝統工芸近畿展 初入選 木漆工芸作家藤寄一正氏に師事
2007年	大阪工芸展 大阪府知事賞
2010年	第57回日本伝統工芸展 初入選 (以降入選11回)
2012年	大阪市内にて独立 制作を始める
2014年	第19回MOA岡田茂吉賞 新人賞
2015年	第15回伝統工芸木竹展 東京都教育委員会賞
2016年	第45回日本伝統工芸近畿展 近畿賞
2019年	第66回日本伝統工芸展 文部科学大臣賞 「栓拭漆三足器」文化庁買い上げ NHK番組「日曜美術館」で仕事振りを紹介される
2020年	第49回日本伝統工芸近畿展 大阪府教育委員会賞
2021年	第68回日本伝統工芸展 日本工芸会保持者賞
現在	日本工芸会正会員



桜拭漆盛器  
(巾47.5cm×奥行29.0cm×高さ10.5cm)  
花びらが風に唄っているようなフォルムの曲線が優雅です。使う人の心を豊かにしてくれ想像力の翼を広げて楽しみたい器です。かすかな線の陰と陽が静と動を醸し出します。



櫻拭漆扇面重箱  
(巾23.8cm×奥行15.5cm×高さ9.1cm)  
上の段と下の段の木目が見事揃ってその美しさに感嘆してしまいます。祝いの席で使いたい扇面、正に扇を広げたような重箱。親から子へ子から孫へ伝えて行きたい美しい、確かな技があります。



柄拭漆線盛器  
(巾58.6cm×奥行27.1cm×高さ4.3cm)  
この揺蕩う木の葉舟のような盛器にあなただった何に乗せるでしょうか？柄の木目の濃淡がリズムを奏でます。浮き出るように微かな線模様削の技が静かに冴えます。



チェリー花器(本体チェリー・台座櫻)  
(本体・巾36cm×高さ37.8cm×厚み5.5cm)  
(台座・径13.2cm×高さ14.5cm・全体の高さ・50cm)  
音叉を横にしたような、スタイリッシュなグッドデザインです。純音、源となる音と共に形があるという風情です。これは花入れなのですが、オブジェとして飾っても素敵です。甲斐氏のやさしい、豊かな遊び心がその空間を和ませます。



櫻拭漆雲形銘々皿  
(巾17.8cm×奥行13.5cm×高さ1.7cm)  
作品に固さは感じられず、ユーモラスで木目が活かされています。甲斐氏の伸びやかな朗らかさが確かな技と共に伝わる作品で、ずっと長く越えて来た時代、その年輪が、美しく語りかけてくれます。



花卉形小箱(蓋:栗 身:桜)  
(巾14.5cm×奥行7.5cm×高さ3.5cm)  
蓋が栗、身が桜、2種の材のマリアージュを楽しみたい。大切な物、美味しい物の中に入れて、いつも側において触れ、眺めていたい愛らしい小箱です。



櫻拭漆黒碗  
(径12.9cm×高さ8.4cm)  
手に持った時に温もりが伝わって来る碗です。甲斐氏の一削り一削りにより、手から心に優しさが伝わって来ます。そしてまた、おいしさも伝わって来るのです。出番の多い碗として、ハレの日、日常に使いたい碗です。



卵殻貼螺旋盃(栓・うずらの卵殻)  
(径6.5cm×高さ6.0cm)  
細やかな卵殻を埋めて行く、その気の遠くなりそうな手仕事に敬意の念を持ちます。ゆらぎの線は陰影の趣で眺め、使う度に刻は豊かに流れる。

木工作家・甲斐幸太郎氏を囲む会 <先着5名様>  
右記の通りギャラリー愛海詩2Fで開催します。早目にギャラリー愛海詩にご予約下さい。どなたでも参加できる有意義な会です。  
日時 令和4年11月26日(土)  
11月27日(日) 両日共 14:00~15:30  
チケット代金 3,000円(お茶、お土産、レクチャー付)